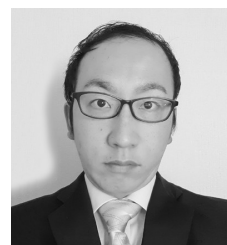


私 の 夫 の 工 夫

特別支援教育を中心とした 学級経営・授業の実践

赤磐市立桜が丘小学校

教諭 御藤 真也



1 はじめに

令和3・4年度に岡山県の「小中学校における特別支援教育推進リーダー養成事業」で、赤磐市内で特別支援教育を中心に推進する特別支援教育推進リーダー（以下、「マイスター」）の任命を受けました。

マイスターの使命は、特別な支援を必要とする児童生徒が安心して生活し、落ち着いて学習に取り組むことができるようにすることです。そのために、主に次のことに重点を置いて、2年間、市内の小中学校を巡回しました。

①小中学校の特別支援教育コーディネーター（以下、「特支コーディネーター」）の養成及び教

職員の指導力向上

②学校園等の連携を含めた特別支援教育の指導体制の充実

このことについて、岡山県教育庁特別支援教育課の「特別支援教育の一層の推進に向けて」特別支援教育推進リーダーを中心とした取組」に、具体的な取組や年間の活動例が記載されています。（資料1）



資料1 小・中学校の特別支援教育の一層の推進に向けて

2 学級経営の実践

令和5・6年度は、通常学級の担任をしています。ここでは、マイスターでの経験を生かして取り組んできた実践について紹介します。これまで、特別支援教育の研究や児童の実態を踏まえて、通常学級の中には、特別な支援が必要な児童が在籍していることを念頭に、学級経営や授業実践に取り組んできました。

本校では、人権週間に合わせて「なかよし集会」が行われています。学級で人権を意識した取組をする際、ポジティブ行動支援を参考にしました。ポジティブ行動支援とは、問題が起きた後に対処するのではなく、よい行動をしたときには、褒めることで予防的に支援することです。

まず、学級活動の間では、学級の児童とともに「相手の立場や気持ちになって行動する」ことができるようにと考えると、次に、

「朝、教室に入ったときに相手に伝わる声であいさつをする」ことや「授業のときに教え合いをする」こと、「友達に優しくする」ことが望ましい行動であると決めました。そして、望ましい行動をしている児童には「グッドカード」を渡したり、ホームルームの時間に友達に優しくされたことや教え合いができたことなどを発表したりするようにしました。朝の準備の時間や授業中という決められた時間ではありましたが、望ましい行動が示されることで、児童の意識が変わり、あいさつの声が大きくなり、お互いに正しい伝え方ができるようになりました。また、グ



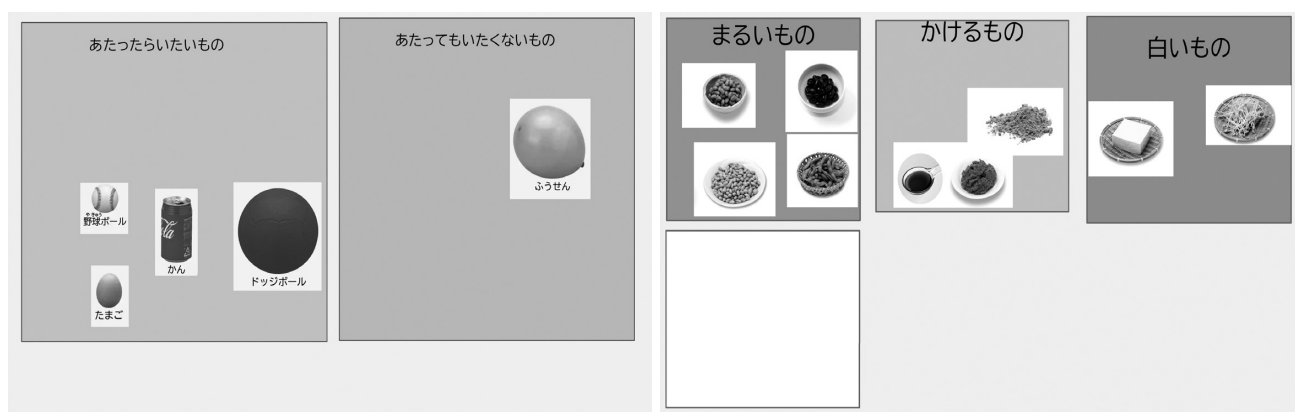
資料2 グッドカードの掲示

ツドカードを掲示することで、みんなの成果が視覚化され、より望ましい行動が強化されました。(資料2)

3 授業の実践

本校の研究テーマは『学びに向かう力』を引き出す授業づくり』であり、その柱として、専門性を生かした指導の工夫があります。授業のユニバーサルデザインや端末の効果的な指導など、それぞれの教員が研究のテーマを考えています。その中で、私は個別最適な学びについて研究に取り組むことにしました。そして、誰一人取り残すことのない教育のためにタブレットを活用することや児童が学び方を選ぶことができることが重要であると考えました。

授業の導入場面では、自分事として学習に取り組むことができるようにタブレットを活用しました。また、国語や算数では、発表ツールアプリを使うことで仲間分けをする活動に取り組むようにしました。自由に分けてよいことと、分



資料3 児童の発表ツールアプリのカードの例

け方の理由を考える活動にすることで、どの児童も抵抗感がなく、自分の考えを表現することができました。(資料3)

4 おわりに

マイスターの立場で授業を参観する機会を多くいただきました。授業を参観する中で、特別な支援を必要とする児童は、先生の話を聞いて、授業を頑張りたい気持ちがあっても、集中できなかったり、別の要因で理解しにくかったりする様子が見られました。そこから私語などをしてしまい、注意されることで、より授業への興味をなくしてしまっているように感じました。

そのため、情報の視覚化など、授業のユニバーサルデザインをもとに、学習への興味や関心をもたせ、惹きつけることや、自分事として捉えられるようにすることが必要です。さらに通常の学級では、

個への支援だけでなく、集団への支援が不可欠であると考えます。

「改訂版 通常の学級の特別支援教育ガイド」には、特別支援教育の観点を取り入れて、「全ての子どもが『分かる』『できる』喜びを実感できる授業」を目指すことが書かれています。(資料4)

授業の中で、どのようなつまづきや困難さが予測されるかを想像し、スモールステップで子どもが「できるかも」と思えることを増やしていくことで、学習への期待をもたせる必要があります。子どもにも「教える」のではなく、子どもから「学び」、子どもの思考に思いを馳せることで、新たな仕掛けや支援を考えていきたいと思えます。



資料4 改訂版 通常の学級の特別支援教育ガイド

私の工夫

数学で対話すること
『つまみ』を感じる授業を
目指して

県立玉野高等学校

指導教諭

岡本

崇志



1 はじめに

高等学校の数学教育において、知識の定着のために『演習』は必須であることは言うまでもありません。数学の演習といえば、生徒に解答を板書させて、教師が解説しながら添削をしていくスタイルが基本でした。私も高校時代にこのスタイルで習っていました。しかし、このスタイルは授業中受け身になるうえに、自分が当たった問題以外の予習が疎かになるという欠点があります。そこで、生徒が主体的に『演習』に取り組める方法を10年前くらいから考え、実践してきました。ここではその一部を紹介します。

2 実践内容

①口頭試問型演習

単元の最後は章末問題などを解き、知識の定着を図ることが多いと思います。私は単元の最後に、既習事項を振り返るワークシートを完成させ、自己の数学的な見方・考え方を深め、論理的に表現できる力を養うことを目標にした口頭試問型演習を取り入れています。口頭試問質問例（資料1）から選択した質問について個別にワークシート（資料2）を完成させ、その後少人数のグループでお互いの考えを共有します。最後に、一人ずつ自身の考えをクラス全体に発表し、その内容について口頭試問を行います。発表する立場で

口頭試問質問例

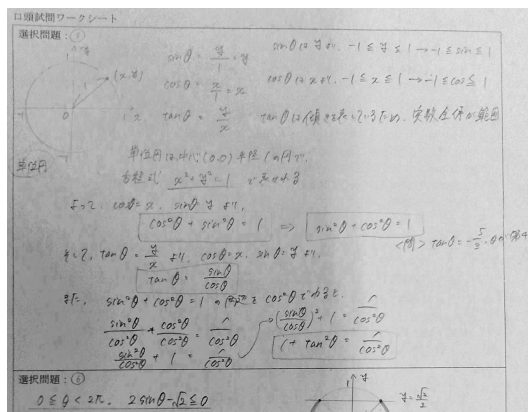
- ① 度数法と弧度法の関係を説明してください。また、弧度法を用いるメリットを挙げてください。
- ② 三角関数の定義を説明し、具体的な角について三角関数の値を求める方法について説明しなさい。
- ③ 三角関数の相互関係について説明しなさい。また、三角関数の相互関係に関する問題を作成し、説明しなさい。
- ④ 三角関数にはいろいろな性質があります。教科書に載っている性質を1つ説明しなさい。また、教科書に載っていない性質を1つ作り、それが成り立つ理由を説明しなさい。
- ⑤ 三角関数のグラフの性質について説明しなさい。また、グラフを変化させる方法について説明し、教科書に載っていないグラフを1つ描きなさい。
- ⑥ 三角関数を含む不等式についての問題を1つ作成し、解き方を説明しなさい。また、グラフを用いた解法について説明しなさい。

資料1 口頭試問質問例

②入試問題で対話する演習

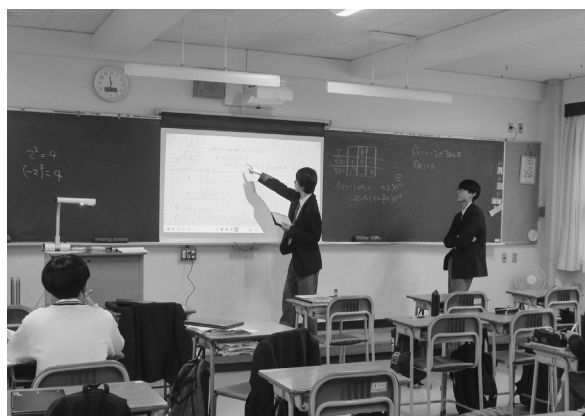
3年生は教科書を終わると、入試問題演習を行います。受験までの限られた時間での演習の在り方については、より一層答案の精度が求められます。一つの問題でい

表者は回答し、質問者が納得・理解するまで生徒同士のやり取りが続きます。時には、そのやり取りを聞いていた他の生徒から、更なる質問・意見が寄せられ、教室全体での議論に発展することもあります。最後にワークシートに事前
に示している評価基準を用いて自己評価を行います。



資料2 生徒の個別ワークシート

かに深い学びができるかに重きを置いていきます。問題の予習は個別で行い、授業ではグループで答案の検討を行います。お互いの答案に対して、なぜそのような解法に至ったのか、論理の飛躍がないかなど、さまざまな視点で指摘を行います。その後、一つのグループが自分たちの考えたベストな答案をクラス全体にプレゼンし、全員で議論・検討し、理解を深めていきます。私自身はコーディネーターに徹し、できる限り生徒同士の対話で授業が構成されるように心がけています。



資料3 答案検討の場面

③ 最終目標から逆算した演習

一般的に、定理や公式を習った後にそれらを活用する演習を行うことが多いと思います。私が取り組んだことは、単元を習い終わった後に解けるようになってほしい問題（例えば入試問題などの融合問題。以下「最終目標」という。）をその単元の知識が全く入っていない段階で取り組み、必要になる定理・公式を生徒自身が主体的に教科書などから利用方法を学び、活用していくという授業形態です。グループ内で教科書に載っ



資料4 グループでの活動

ている定理・公式を分担して理解を深めていきます。各自が理解したことをグループのメンバーに共有し、最終目標の答案を完成させていきます。最後にグループごとに答案を発表し、全体で定理・公式の確認を行っていきます。

課題を解決するときに必要な知識をグループで思考し、主体的に定理や公式を学ぶことで、より一層理解が深まります。生徒からは協働しながら課題解決するプロセスが自己の成長につながったという声が多く聞かれました。



資料5 クラスでの発表

3 おわりに

数学は生徒から苦手意識を持たれることが多い教科であることは、教えている私自身が痛感しています。そのマイナスイメージを少しでもプラスに転じることができれば、生徒の人生に少なからず貢献できると考えています。そのとき思いついた私の中のキーワードが『対話』でした。生徒同士が数学を共通言語として対話することで、知識の整理が行われ、より深い理解につながっていきます。理解したつもりでも言葉にすると上手く言えないこともあります。逆に普段数学が苦手だと公言している生徒がとても上手に説明している姿も見られます。以前、公開授業を行った際、指導・助言にいられた大学の先生から「生徒たちが対話に『うまみ』を感じていますね」と言われました。今後も数学を通して生徒同士が対話すること、生徒自身が数学と対話できるようになることを追究していきます。